

十月の末

宮沢賢治

青空文庫

嘉ツコは、小さなわらじをはいて、赤いげんこを二つ顔の前にそろえて、ふっふっと息をふきかけながら、土間から外へ飛び出しました。外はつめたくて明るくて、そしてしんとしています。

嘉ツコのお母さんは、大きなけらを着て、縄を肩にかけて、そのあとから出て来ました。「母、昨夜、土あ、凍みだじやい。」嘉ツコはしめった黒い地面を、ばたばた踏みながら云いました。

「うん、霜あ降ったのさ。今日は畑あ、土あぐじゃぐじゃづがべもや。」と嘉ツコのお母さんは、半分ひとりごとのように答えました。

嘉ツコのおばあさんが、やつぱりけらを着て、すっかり支度をして、家の中から出て来ました。

そして一寸手をかざして、明るい空を見まわしながらつぶやきました。

「爺んごあ、今朝も戻て来ないがべが。家であこつたに忙がしでば。」

「爺んごあ、今朝も戻て来ないがべが。」嘉ツコがいきなり叫びました。

おばあさんはわらいました。

「うん。けづな爺じんごだもな。酔よたぐれでばがり居で、一向仕事助すけるもさないで。今日も町で飲んでらべあな。うなは爺いんごに肖にるやないじやい。」

「ダゴダア、ダゴダア、ダゴダア。」嘉ッコはもう走はつて垣かきの出口の柳やなぎの木を見ていました。

それはツンツン、ツンツンと鳴いて、枝えだ中じゆうはねあるく小さなみそさざいで一いっ杯ぱいでした。

実に柳は、今はその細長い葉をすっかり落して、冷たい風にほんのすこしゆれ、そのてっぺんの青ぞらには、町のお祭りの晩の電氣菓子でんきがしのような白い雲が、静に翔かけているのでした。

「ツツンツツン、チ、チ、ツン、ツン。」

みそさざいどもは、とんだりはねたり、柳の木のなかで、じつにおもしろそうにやっています。柳の木のなかというわけは、葉の落ちてカラツとなった柳の木の外側には、すっかりガラスが張つてあるような気がするのです。それですから、嘉ッコはますます大よろこびです。

けれどもとうとう、そのすきとおるガラス函ばこもこわれました。それはお母さんやおばあ

さんがこつちへ来ましたので、嘉ッコが「ダア。」といいながら、両手をあげたものからです、小さなみそさざいどもは、みんなまるでまん円になって、ぼろんと飛んでしまったのです。

さてみそさざいも飛びましたし、嘉ッコは走って街道かいどうに出ました。

電信ばしらでんしんばしらが、

「ゴーゴー、ガーガー、キイミイガアアヨオワア、ゴゴー、ゴゴー、ゴゴー。」とうなっています。

嘉ッコは街道のまん中に小さな腕うでを組んで立ちながら、松並木まつなみきのあっちこつちをよくよく眺ながめました、松の葉がパサパサ続つくばかり、そのほかにはずうとはずれのはずれの方に、白い牛のようなものが頭だか足だか一寸出しているだけです。嘉ッコは街道を横みちぎって、山の畑の方へ走りました。お母さんたちもあとから来ます。けれども、この路みちならば、お母さんよりおばあさんより、嘉ッコの方がよく知っていたのです。路のまん中に一寸顔を出している円いあばたの石ころさえも、嘉ッコはちゃんと知っていたのです。厭あきる位知っていたのです。

嘉ッコは林にはいりました。松の木や櫓ならの木が、つんつんと光のそらに立っています。

林を通り抜けると、そこが嘉ツコの家まめばたけの豆畑まめばたけでした。

豆ばたけは、今はもう、茶色の豆の木でぎっしりです。

豆はみな厚い茶色の外套がいたうを着て、百列にも二百列にもなって、サツサツと歩いている兵隊のようです。

お日さまはそらのうすぐもにはいり、向うの方のすすきの野原がうすく光っています。

黒い鳥がその空の青じろいをはてを、ななめにかけて行きました。

お母さんたちがやつと林から出て来ました。それから向うの畑のへりを、もう二人の人が光ってこっちへやって参ります。一人は大きく一人は黒くて小さいのでした。

それはたしかに、隣となりの善ぜんコと、そのお母さんとにちがいありません。

「ホー、善コオ。」嘉ツコは高く叫びました。

「ホー。」高く返事が響ひびいて来ます。そして二人はどっちからもかけ寄って、ちょうど畑さかいの堺さかいで会いました。善コうなの家の畑も、茶色外套の豆の木の兵隊で一杯です。

「汝うないの家さ、今朝、霜降ったが。」と嘉ツコがたずねました。

「霜あ、おれあの家さ降った。うないの家さ降ったが。」善コがいました。

「うん、降った。」

それから二人は善コのお母さんが持つて来た蓆むしろの上に座すわりました。お母さんたちはうしろで立つて談はなしています。

二人はむしろに座つて、

「わああああああああ。」と云いながら両手で耳を塞ふさいだりあけたりして遊びました。ところが不思議なことは、「わああああああああ。」と云わないでも、両手で耳を塞いだりあけたりしますと、

「カーカーココー、ジャー。」という水の流れるような音が聞えるのです。

「じゃ、汝うな、あの音あ何の音だが覺おぼだが。」

と嘉ツコが云いました。善コもしばらくやつて見ていましたが、やつぱりどうしてもそれがわからないらしく困つたように、

「奇きた体たいだな。」と云いました。

その時丁度嘉ツコのお母さんが畦あぜの向うの方から豆を抜きながらだんだんこっちへ来ましたので、嘉ツコは高く叫びました。

「母が、こう云ゆにしてガアガアど聞えるものあ何だべ。」

「西根山にしねやまの滝たきの音さ。」お母さんは豆の根の土をばたばた落しながら云いました。二人

は西根山の方を見ました。けれどもそこから滝の音が聞えて来るとはどうも思われませんでした。

お母さんが向うへ行つて今度はおばあさんが来ました。

「ばさん。こう云ゆにしてガアガアコーコーど鳴るものあ何だべ。」

おばあさんはやれやれと腰こしをのぼして、手の甲こうで額ちよつとを一ちよつと寸こすりながら、二人の方を見て云いました。

「天あまの邪鬼しやぐの小便しよんべの音さ。」

二人は変な顔をしながら黙だまつてしばらくその音を呼び寄せて聞いていましたが、俄にわかに善ぜんコがびつくりする位叫なびました。

「ほう、天の邪鬼の小便あ永いな。」

そこで嘉ツコが飛びあがつて笑つておばあさんの所に走つて行つていいました。

「アツハツハ、ばさん。天の邪鬼の小便あたまげだ永いな。」

「永またいてさ、天の邪鬼あいつも小便、垂れ通しさ。」とおばあさんはすまして云いながら又豆またを抜きました。嘉ツコは呆あきれてぼんやりとむしろに座りました。

お日さまはうすい白雲にはいり、黒い鳥が高く高く環わをつくっています。その雲のこつ

ち、豆の畑の向うを、ねずみいろ鼠色の服を着て、鳥打をかぶったせいのむやみに高い男が、なにかたくさん肩にかついでおおまた大股に歩いて行きます。

「兵隊さん。」善コが叫びながらそちへかけ出しました。

「兵隊さんだない。てつぽう鉄砲持ってないぞ。」嘉ツコも走りながら云いました。

「兵隊さん。」善コが又叫びました。

「兵隊さんだない。鉄砲持ってないぞ。」けれどもその時は二人はもう旅人の三間ばかりこつちまで来ていました。

「兵隊さん。」善コは又叫んでからおかしな顔をしてしまいました。見るとその人は赤ひげで西洋人なのです。おまけにその男が口を大きくして叫びました。

「グルルル、グルウ、ユー、リトル、ラズカルズ、ユー、プレイ、トラウント、ビ、オツフ、ナウ、スカツド、アウエイ、テウ、スクール。」

かみなりと雷のような声でどなりました。そこで二人はもうグーとも云わず、まん円になって一目散に逃げました。おもしろするとうしろではいかにも面白そうに高く笑う声がします。向うの方ではお母さんたちが心配そうに手をかざしてこつちを見ていましたが、やがて一寸おじぎをしました。二人は振り返って見ますとその鼠色の旅人も笑いながら帽子ぼうしをとっておじ

ぎをして居りました。そして又大股に向うに歩いて行つてしまいました。

お日さまが又かつと明るくなり、二人はむしろに座つてひばりもないのに、

「ひばり焼げこ、ひばりこんぶりこ、」なんて出鱈目なひばりの歌を歌っていました。

そのうちに嘉ツコがふと思ひ出したように歌をやめて、一寸顔をしかめました、俄かに云いました。

「じゃ、うないの爺んごあ、酔つたぐれだが。」

「うんにや、おれあの爺んごあ酔つたぐれだない。」善コが答えました。

「そだら、うないの爺んごど俺あの爺んごど、爺んご取つ換えだらいがべじやい。取つ換えないどが。」嘉ツコがこれを云うか云わないにウンと云うくらいひどく耳をひっぱられました。見ると嘉ツコのおじいさんがけらを着て章魚たこのような赤い顔をして嘉ツコを上から見おろしているのです。

「なにしたど。爺んご取つ換えんど。それよりもうなのごと山山のへつぱり伯父おじさ呉けでやるべが。」

「じさん、許せゆるせ、取つ換えないはんで、ゆるせ。」嘉ツコは泣きそうになつてあやまりました。そこでじいさんは笑つて自分も豆を抜きはじめました。

*

火は赤く燃えています。けむりは主におじいさんの方へ行きます。

嘉ツコは、黒猫くろねこをしつぽでつかまえて、ギツと云うくらいに抱だいていました。向う側ではもう学校に行っている嘉ツコの兄さんが、鞆かばんから読とく本ほんを出して声を立てて読んでました。

「松を火にたくいろりのそばで

よるはよもやまはなしがはずむ

母が手ぎわのだいこなます

これがいなかのとしこしぎかな。第十三課……。」

「何したど。大根なますだど。としこしぎがなだど。あんまりけづな書物だな。」とおじいさんがいきなり云いました。そこで嘉ツコのお父さんも笑いました。

「なあにこの書物あ儉約けんやく教えたのだべも。」

ところが嘉ツコの兄さんは、すっかり怒ってしまいました。そしてまるで泣き出しそう

になつて、読本を鞆にしまつて、

「嘉ツコ、猫おおれさ寄越せじや。」と云いました。

「わがないんちや。厭んたんちや。」と嘉ツコが云いました。

「寄越せつたら、寄越せ。嘉ツコお。わあい。寄越せじやあ。」

「厭んたあ、厭んたあ、厭んたつたら。」

「そだら撲だぐじやい。いいが。」嘉ツコの兄さんが向うで立ちあがりました。おじいさんがそれをとめ、嘉ツコがすばやく逃げかかったとき、俄に途方もない、空の青セメントが一ぺんに落ちたというようなガタアツという音がして家はぐらぐらつとゆれ、みんなはぼかつとして呆れてしまいました。猫は嘉ツコの手から滑り落ちて、ぶるるつとからだをふるわせて、それから一目散にどこかへ走つて行つてしまいました。「ガリガリツ、ゴロゴロゴロゴロ。」音は続き、それからバアツと表の方が鳴つて何か石ころのようなものが一散に降つて来たようすです。

「お雷さんだ。」おじいさんが云いました。

「雹だ。」お父さんが云いました。ガアガアツというその雹の音の向うから、

「ホーオ。」ととなりの善コの声が聞えます。

「ホーオ。」と嘉ッコが答えました。

「ホーオオ。」となりで又叫んでいます。

「ホーオオー。」嘉ッコが咽喉のど一杯ふえ笛のようにして叫びました。

俄に外の音はやみ、淵ふちの底のようにしずかになってしまつて気味が悪いくらいです。

嘉ッコの兄さんは電を取ろうと下駄げたをはいて表に出ました。嘉ッコも続いて出ました。

空はまるで新らしく拭ふいた鏡のようになめらかで、青い七日ごろのお月さまがそのまん中にかかり、地面はぎらぎら光つて嘉ッコは一ちよつと寸氷砂糖をふりまいたのだとさえ思いました。

南のずうつと向うの方は、白い雲か霧きりがかかり、稲いな光ひかりりが月あかりの中をたびたび白く渡わたります。二人は雀すずめの卵ぐらいある電の粒つぶをひろつて愕おどろきました。

「ホーオ。」善ぜんコの声がします。

「ホーオ。」嘉ッコと嘉ッコの兄さんとは一所に叫びながら垣根かきねの柳の木の下まで出て行きました。となりの垣根からも小さな黒い影かげがプイッと出てこつちへやって参ります。善コです。嘉ッコは走りました。

「ほお、電だじやい。大きじやい。こつたに大きじやい。」

善コも一杯つかんでいました。

「俺家おらのなもこの位あるじやい。」

稲ずまが又白く光って通り過ぎました。

「あ、山山のへつぴり伯父。」嘉ツコがいきなり西を指さしました。西根の山山のへつぴり伯父は月光に青く光って長々とからだを横たえました。

青空文庫情報

底本：「新編風の又三郎」新潮文庫、新潮社

1989（平成元）年2月25日発行

1989（平成元）年6月10日2刷

入力：蔣龍

校正：noriko saito

2008年7月22日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

十月の末

宮沢賢治

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>